

(第3号様式－2)

学校評価の公表について (手段・時期・内容等)	・3月中にホームページにアップして、学校評価を公表する。
----------------------------	------------------------------

領域	学校関係者評価の結果	学校評価のまとめ (課題と次年度に向けた改善方策)
学校経営	1 校務分掌の業務内容等説明の資料があると分かりやすくなるが、分掌の業務内容と分担は適正か。 2 地域の自治会や施設等の催し物に、本校生が“呼んでもらえる”ようになったことなど、アンケートの数字には表れない部分で改善が見られ、喜ばしい。 3 一般にはなかなか話の進まない避難所運営について、地域との協議が進行していることが評価に値する。 4 地元自治会や福祉施設とブラスバンド部や美術部の交流が行われていたり、開かれた学校づくり委員会での意見交換が活発になったりしている。雰囲気の良い委員会になっている。 5 「入学前に法典高校の特色を知っていた」「学力は向上している」の項目について、この4年間ほぼ横ばいである。改善の方策がとられていないのではないか。	1 資料については来年度の自己評価資料に加える。 業務内容については、特に教務部に集中している感があるため、昨年度から改善に努めている。例えば、年間行事予定、学校説明会、入学許可候補者説明会、内規の管理を総務部に移管した。 来年度以降も、入学者選抜業務の見直しなどを行い、分掌業務の適正化に努める。 2 開かれた学校づくり委員の地元青少年問題協議会役員から、10年前と比べ、別な学校のようなのだとの言葉もあった。 自己啓発指導重点校の指定解除後の来年度以降についても、教職員一丸となった取組によって、現状を維持、発展させる。 3 防災をキーワードにした地域・近隣との連携を図ることは、地域に見守ってもらえる学校づくりの観点からも重要であり、開かれた学校づくり委員会及びミニ集会のテーマにも適している。 倒壊予想家屋の情報など、行政側からの資料に基づき、現状や課題を事前に周知するなども含め、徐々に進めていくことが肝要である。 4 生徒の地域イベントへの参加や福祉施設との交流は、数年前から打診があったが、部活動顧問の積極的な動きによって実現した。 今後も開かれた学校づくり委員会を学校の情報発信及び情報収集の機会と捉え、信頼される学校づくりに活かしていく。 5 ホームページの更新の頻度は昨年度に比較してかなり向上している。また、中学校訪問や中学校での説明会、外部機関が設定する説明会に招かれる回数も増えた。県の「一校1キラッ!マップ」や「魅力ある学校づくり大賞」へのエントリー、また、「千葉日報」の「エンジョイ!学園ライフ」での記事掲載、学校ポスターの制作など、広報活動は活発に行っている。 今年、夏の学校説明会への参加者の内、11月の学校説明会に参加する生徒の割合が少ないことが分かった。中学生が行きたい学校と受検できる学校との間に差があるのではないか。

	6 「避難所運営連絡会」の事務局については事務局を船橋法典高校に置いてほしい。自治会では役員が2年くらいで交代になるので、継続性の点で問題がある。 7 「避難所運営連絡会」で、年一回でも訓練を実施したい。市の職員も取り込み、班編制や業務について練習しておきたい。 8 「避難所運営連絡会」の規約づくりをしたい。	6 学校側の体制として、開かれた学校づくり委員会が中心となって事前連絡や協議の場を提供することは可能と思われるが、主体は災害の際に避難してくる地域の方々である。 また、実際に避難所が立ち上がった場合には、学校は早期の業務再開を図る立場になるので、規約づくりにおいて、慎重に協議すべきである。 P T A役員としても、事前の様々な協議に参加することはできるが、災害時には自分の地元の避難所等に行くことになる。このことも考慮すべきである。 7 防災について、地域と一緒に考え、訓練などを実現したい。 昨年度と本年度の2年間で、学校と地域との交流の容れ物ができたと感じる。次の段階ではいろいろなことを取りあえず入れることを考えたい。そして、ある程度中味が入ったところで活動を整理、発展させるという手順を丁寧に踏みながら発展させていきたい。 訓練や行事等は、多くの人たちが学校に来てみて、顔を合わせておく目的もある。また、実際の場面では避難してきた人々の単位ごとの都合で動くことになると思われるので、班編制などが名目だけのものになってもいけない。スキル習得のマニュアルを作ることや生徒にとっても、将来必ず担うことになる役割で無駄になることはないので、可能な部分で前進させたい。 8 生徒の在校時に発災した場合の対応、危機管理教育、事前の地域割の必要性などが考えられる。 現在、学校と地域の双方が今後検討していくためのたたき台ができている段階であるが、行政当局の施策や意向なども考慮しながら、徐々にでも、確実に進めたい。
学 習 活 動	1 「授業中きちんと学習活動に取り組んでいる」について17.9%の生徒が否定的な回答である。また「先生方は授業を分かりやすくする工夫をしている」について27.7%の生徒が否定的な回答をしている。これらの点を真摯に受けとめるべきである。 2 事務分掌の仕事をしてしながら教科指導にあたっているのは苦勞が多いことと思う。高校の先生は学業を中心に指導するべきではないか。	1 基礎学力の定着や進学希望者の増加を見越した学習活動の充実は、まさに来年度からの本校の最大の課題と言える。 学習指導要領改訂も迫っている今、これからのグローバル社会を生き抜く子どもの育成のための授業改善に一層努める。 2 高等学校の本質は子どもたちの学力向上にあるが、社会の学校への期待の大きさから、様々な役割を担うこととなっている。 これを踏まえ、校内業務の合理化・適正化は学校教育全体の課題であり、全教職員が意識を持って取り組むべき課題である。

生徒指導	1 保護者は子どもに学校の様子を聞きながらアンケートに回答しているので、数字に表れている部分も重要である。例えば「欠席・遅刻・早退をしない」について、保護者は89.7%が肯定的に捉えているのに対して、子どもたちは77.4%しか肯定的に捉えていない。この理由を知りたい。 2 「先生方は生徒の相談に親身になって応じている」への肯定的な回答が、生徒72.4%、先生93.3%、「一人一人を大切にした指導をしている」への肯定的な回答が、生徒71.6%、先生95.6%となっており、両者の意識が乖離している。再考の余地があるのではないか。 3 生徒と先生とで“親身”の感覚に違いがあるように思う。保護者対応もあり、業務過多から精神的に疲れた先生も出ているようである。本業の充実を望む。	1 学校での指導は、「現状が良ければより良くを目指す」ものである。1回の遅刻を「よし」するか「0にできる」と指導するかの違いで、子どもの受け取りが違ってくるのではないかと考える。 これが行きすぎると、自己肯定感を挫く事にもなりかねないことに注意しながら、「より良く」を目指した指導を継続する。 2 次項3「生徒と先生とで“親身”の感覚に違いがある」ということが考えられる。 また、高校生という発達段階にあつては「自己判断力」「決断力」等自主性を伸ばす観点からの指導もあり、「高校の先生は冷たい」などの印象を抱く場合もある。 本校の生徒指導は「厳しく、優しく、美しく」という言葉にまとめている。きめ細かく見守りながらも、将来に向けた自主性の育成も図る指導を継続する。 3 前半部分については前項2に準ずる。 後半について、学校への期待の大きさから、様々な期待や要望が寄せられる現状が一部教職員の心身の疲労を生んでいる現状がないとは言えない。 教職員のチームワークと業務改善、効率化、業務の重複の排除などを通して、心身の健康に十分配慮しながら県民の期待に応える努力をする。
キャリア教育	1 卒業生の進路実現について、年々向上している。進路指導の成果であると思われるが、生徒及び学校の評判がよくなっていることも要因であろう。 2 進学志望の生徒が増えているようであるが、大学等進学に対応できる授業など、学校として次の段階に進む体制づくりをお願いしたい。	1 進路多様校としての困難もあるが、多様校だからこその利点も活用しながら、引き続き、子どもたちの夢の実現、進路希望の実現に向け、職員一丸となって努力する。 2 自己啓発指導重点校10年の成果としての現状（進学希望者の増加）にきちんと対応することによって今後の本校の展望は開ける。
特別活動	1 部活動が非常に活発に行われており、それによって生徒の学校生活全般への好影響があるように思われる。 2 修学旅行で沖縄を訪れているが、どのような効果が見られるのか。	1 学習活動を含めた学校生活に前向きに取り組ませるための部活動の活性化であることを教職員全体が共通理解して現状をさらに発展させる努力をする。 2 沖縄では(1)平和学習(2)地域文化理解(3)体験学習の3つをテーマとしている。 (1)ひめゆり記念館、入壕体験などを通じて、祖先への感謝と平和の尊さを学ぶ。 (2)民泊を通じて沖縄の文化などに接することで異文化への寛容性を育成する。 (3)シュノーケリング、シーカヤックなどの活動を全員が行う。 日常生活で体験できない見聞ができるとともに集団生活での規律意識が育つ。